

『大陸新報』に見る戦時期上海のユダヤ社会
— (4) 幻の映画「祖国を追はれて」をめぐって—

菅野賢治

東京理科大学紀要（教養編）

第54号 抜刷

2022年3月25日

『大陸新報』に見る戦時期上海のユダヤ社会

—— (4) 幻の映画「祖国を追はれて」をめぐる ——

菅野賢治

本連載の時間軸上、われわれは今1940年初頭に身を置いているが、ここでいったん時系列から離れ、1939年末から翌40年初めにかけて上海に避難中のドイツ・ユダヤ人たちが自主制作した映画「祖国を追はれて」に一回分の叙述を割いておきたい。

【記事33】昭和14（1939）年12月16日（土）夕刊2面「映画になるユダヤ人街／皇軍の温情下に楽しむ建設図」

ナチス政権の嵐に追はれ昨年十二月漂泊の宿命を背負ったユダヤ人の大群が上海に安住の地を求めて以来一年日本軍当局の温情ある保護の下にウエイ・サイド楊樹浦の一角に新しき彼らの街を建設し今では平



和の生活を楽しんでゐるがこの尊い汗の建設譜と秩序ある現実の姿を映画化してアメリカの金融報道宣伝の枢軸を握れる同胞を初め全世界に分散せる同胞を紹介すべくノイマン夫人を中心として零細な基金を募り中華映画会社の支援を得べく折衝中であつたが、このほどに至り両者間に話がまとまつたのでスタッフもすべて彼等の仲間から選び昔映画界に活躍したツアンフオーレオン（製作）ツルダーニニューマン・ワルソン（監督）ノイマン夫人（脚本）チヨンコー（撮影）氏等の顔触れで愈よ明十六日から撮影を開始することになった、これが完成の暁は正義日本の真意を認識せしめる結果ともなるので各方面から非常に期待されてゐる（写真はユダヤ人の住む楊樹浦）[全文]

記事中、映画の制作陣として名前が挙げられている人々のなかから、筆者が現時点で確実に同定できているのは、「脚本」担当とされている「ノイマン夫人」こと、ゲルトルート（ゲルトルーデ、トルーデ）・ノイマン＝ヴォルフゾーン（Gertrud (Gertrude, Trude) Neumann-Wolffsohn (Wolfson), 1894-1968)のみである。

この時、映画の制作にたずさわったのが、ダッハウとブーヘンヴァルトの強制収容所を体験した後、上海に移ってきたオーストリアの映画プロデューサー、ヤーコプ・フレック（Jacob Fleck, 1881-1953）とその妻ルイーゼ（Luise, née Veltée, 1873-1950）であったとの情報が得られているが⁽¹⁾、記事中の「ツアンフオーレオン」とは姓名の綴り・発音が似ても似つかない。「監督」として言及されている「ツルダーニニューマン・ワルソン」は、重複ながら「トルーデ・ノイマン＝ヴォルフゾーン」を意味しているのかもしれない。「撮影」担当として挙げられている「チヨンコー」は、「中華電影」の「中華 (Zhonghua)」を記者が聞き間違えたのか、あるいは「中華電影」における川喜多長政（1903-81）の右腕的存在、張善琨（Zhang Shankun, 1905-57）であった可能性もあるが、いまだ確証は得られていない⁽²⁾。

この映画制作の顛末について、1928年、川喜多長政により設立された外国映画輸入配給会社「東宝東和」の五十年史『東和の半世紀 1928-1978』——文責はおそらく映画評論家、清水晶（1916-97）——は以下のように伝えている。

当時、いっさいの記録から抹殺された秘話として、こんなことがあった。

蘇州河以北の共同租界が黄浦江ぞいに東に伸びた楊樹浦（正しくはヤンシュプーだろうが、日本人は普通ヤンジュッポと言っていた）と呼ばれる一帯は、日中戦で廢墟と化した後、ナチ・ドイツから追われたユダヤ人の移住地区に指定された⁽³⁾。彼らは雑草のような生活力を示して、喫茶店、レストラン、バーなどを開き、ユダヤ人街といってもいい特異な一角を形づくった。そうした亡命ユダヤ人の中にゲルトルート・ヴォルフソンという女流映画監督がいた。いつどんな時代でも国際親善の殉教者、ともいうべき川喜多は、ユダヤ人の悲運に深い同情を持ち、ヴォルフソン女史の、上海におけるユダヤ移民の新生の姿を描く記録映画を作りたいという願いを快く受け入れた。題名も『祖国を追はれて』と決定し、中華電影から機材やスタッフの提供を約束した上、完成の暁は世界各国に輸出して、ユダヤ人に対する理解を深め、支持を訴える一助にしようとしてまで考えた。

当時の日本とナチ・ドイツの親近関係からいって、ナチスに追われたユダヤ人に対する川喜多のこうした温情は、かりにも日本軍の監督下にある組織内の日本人として常識を絶したものであった。果せるかな日本軍はこの撮影に強硬に反対したが、川喜多は、表面はあくまでもユダヤ人の自発的な製作、中華電影は単なる技術援助という名目で撮影を続けた。

しかし、日独伊三国同盟が調印（一九四〇年九月二十七日）されるにおよんでは、いくら何でも日本軍として許すわけにはいかない。撮影が八分通り進んだところで、記録映画『祖国を追はれて』は、日本軍から無条件中止を命じられた⁽⁴⁾。〔傍点は引用者による〕

前段にあるとおり、当時の楊樹浦が、ドイツ・ユダヤ避難民たちの懸命な努力——「雑草のような生活力」——により、喫茶店、レストラン、バーなどが賑やかに軒を連ねる独特の文化的盛り場を形成していたことは、『大陸新報』上、別の記事からも窺い知ることができる。

【記事34】昭和15（1940）年2月27日（火）夕刊3面「ユダヤ人の街へ、／スピード上海道中記（中）／弥次＝ディック・ミネ 喜多＝ベティ・

福田]

ミネ「喜多さん此処が楊樹浦のユダヤ人街だよ、一寸恐いみたいだらう、彼等の旺盛な生活力は」

ベテイ「……」

ミネ「事変後の新しい現象だよ」

ベテイ「弥次さんこの辺で一寸一休みませう」

(御兩人バーに入る)

ミネ「オヤ〔繰り返し記号〕これはまたやたらに壁中絵だらけだネ喜多さん」

ベテイ「弥次さんらしくもない、これが故国ドイツを追はれたユダヤ人唯一の娯楽場のバーよ芸術を愛好する彼らは何処へ行つても芸術を忘れない、これが彼等の生活力のもととなるのよ」

ミネ「なる程ネ喜多さんどうしてなか〔繰り返し記号〕物識りだ、では一つ本場のドイツビールでも飲むかな」

ベテイ「ユダヤ人も幸福ね、こうして皇軍の理解ある温い保護下で何の不自由もなく生活出来るなんて」

ミネ「本当だよ、吾々も安心して上海を堂々威張つて歩けるのも皆兵隊さんのお陰だ、さあこれから戦跡へ出掛けよう」
(写真はバーの御兩人)

[全文]



川喜多長政の篤い信頼を得た映画評論家、辻久一(1914-81)は、召集をうけて上海軍報道部に配属となり、「中華電影」と密接に協力して日本軍占領下の映画行政に当たった経歴の持ち主であるが、彼においても、往時

の上海の思い出として真っ先に蘇ってくるのは、カフェの薄い利鞘をもって「必死になって生きよう」とするユダヤ人たちの姿であった。

それまで、朝のコーヒーは、報道部を出て一〇〇メートルばかりの、老靶子路北四川路かどの、小きれいで、白系ロシアの娘がサービスしてくれる「チャッカリアン」という喫茶で飲むことにしていたが、一度、さらに一五〇メートルばかりさきの横丁にある小ぎたないユダヤ人の店に入ってみた。サービスの娘もいず、グルチョ・マルクスそっくりのマスターと中年のアシスタントしかいないのに、そのコーヒーの味がよくて安いので、あくる日からマルクス氏へくらがえしたものである。それくらい、彼らは必死になって生きようとしていた⁽⁵⁾。

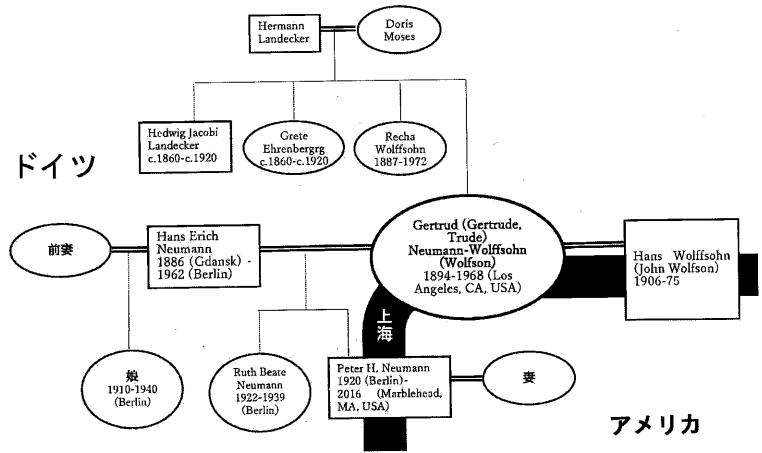
ゲルトルート以下「祖国を追はれて」の制作陣が銀幕に映し出そうとしたのも、言葉もままならぬ異国の地で、まさにゼロからの生活再建に励むこうしたユダヤ移民・難民たちの日常であったに違いない。

ゲルトルート・ノイマン＝ヴォルフゾーンについて

ゲルトルート・ヴォルフゾーンは、おそらく非ユダヤ出自の父ヘルマン・ランデッカー (Hermann Landecker, 1927年頃没) と、旧姓から推しておそらくユダヤ出自の母ドーリス (Doris, née Moses, 1895年没) のあいだに、1894年、ドイツで生まれた。1887年生まれ姉レーハ (Recha) の出生地がブランデンブルク州レーヴェンベルガー・ラントのFalkenthalと記録され、1895年、母ドーリスが自殺 (原因など不明) を遂げた場所も、同じレーヴェンベルガー・ラントのObere Havelniederungとされているため、ゲルトルートの生地もレーヴェンベルガー・ラントであった可能性が高い⁽⁶⁾。

ゲルトルートは、1919年、ベルリンの映画業界で勇名を馳せつつあった非ユダヤ出自のハンス・エーリヒ・ノイマン (Hans Erich Neumann, 1886-1962) と結ばれ、ペーター (Peter, 1920-2016) とルート・ベアータ (Ruth Beate, 1922-39) の二子をもうけた。その後、姉レーハの夫でユダヤ出自の映画人カール・ヴォルフゾーン (Karl Wolffsohn, 1881-1957) の秘書として映画の世界に関わるようになった。

1929年頃、ノイマンの映画事業が (おそらく世界大恐慌のあおりで) 経



營破綻し、夫婦仲も険悪になると、ゲルトルートは、姉レーハの懇望をよそに、義兄カール・ヴォルフゾーンの甥で12歳年下のハンス・ヴォルフゾーン (Hans Wolffsohn, 1906-75) のもとへ走った⁽⁷⁾。ハンスは、第一次大戦で戦死した父親から引き継いだ小さな印刷所をベルリンで営んでいたが、折からのナチス反ユダヤ政策を逃れる目的もあってのことだろう、1939年1月、ゲルトルートとともに上海行きを決断する。

前夫ノイマンとのあいだに生まれた息子ペーターの追悼記事⁽⁸⁾によると、ペーター自身は「21歳の誕生日」(すなわち1941年6月10日)に政治難民としてドイツを脱ち、「数年前にドイツを後にしていた母と義父に合流することにした」。彼がシベリア鉄道でソ連を横断し、満州国を通過して上海へ船でたどり着いたのは、6月22日の独ソ戦開戦により国境が封鎖される直前のことであったという。

今日、川喜多記念映画文化財団に保存されている「祖国を追はれて」の撮影風景を収めた写真⁽⁹⁾には、その中央にゲルトルートとおぼしき女性の姿がはっきりと写っている。辻久一によれば⁽¹⁰⁾、右手、瓦礫の山の後方に立っているネクタイ姿の男性は、「中華電影」の中心人物であった詩人、作家、映画監督で、その後ほどなく(1940年9月)上海でテロに倒れることとなる劉呐鵬 (Liu Naou, 1900-40) であるという。カメラの左手、しゃがみ込んでファインダーを覗いている男性は、ハンス・ヴォルフゾー

ンである可能性が高い（その後ろに立ってマガジン部に手を添えているのが、「中華電影」から派遣された日本人ないし中国人カメラマンでもあろうか）。

1939年末から翌40年初め、「祖国を追はれて」の制作に取り組んだ後、ゲルトルート、ハンスならびにペーターは、ささやかな印刷工房を切り盛りしながら、日本軍政下上海での避難民生活を耐え忍んだ。1944年、上海、提籃橋地区の日本官憲が作成した外国人居留者名簿⁽¹¹⁾には彼らに相当する名前が見えないため、印刷工房兼自宅は「指定居住区」の外に位置していたと思われる。戦後、1946年にまずはハンスがアメリカに渡り（以後、ジョン・ウォルフソンを名乗る）、『ロサンゼルス・タイムズ』紙の印刷部門に職を得、48年、ゲルトルートも後に続いてロサンゼルスに腰を落ち着けた⁽¹²⁾。息子ペーターは1950年まで上海に留まり、中国美術を海外



映画「祖国を追はれて」の撮影風景
(写真協力：公益財団法人川喜多記念映画文化財団)

に知らしめる出版業にたずさわったのち、アメリカに居を移している。

本稿の筆者は、目下、アメリカ在住の知人などを介してゲルトルート（とくに息子ペーター）の末裔たちとの接触を試み、情報収集に努めているが、いまだ具体的な成果は上がっていない。われわれがもっとも関心のある点、すなわち「祖国を追はれて」のリアルないし編集途上のフッテージが、その後、アメリカに持ち運ばれたのか、あるいは中国に置き去りにされたのか、という点も未解明のままである（前掲、ゲルトルートの姪孫に当たるミハエル・ヴォルフゾーンの詳細な家族年代記にも、映画制作に関する記述は見当たらない）。

川喜多の公職追放とゲルトルートによる弁護

川喜多長政と日本占領下中国の映画界との深い関係については他書に譲り⁽¹³⁾、ここでは、戦後の1947年、川喜多が「中華電影」時代の活動の責を問われ、公職追放の該当者とされた事象に注目する。

「東宝東和」の五十年史によれば――

[外国映画輸入の道を閉ざした障害の] もう一つは映画界の公職追放である。極東軍事裁判における戦争犯罪の追求と並んで、政治・経済・マスコミの各方面にわたり、日中戦争勃発から対米英開戦まで（一九三七年七月七日から一九四一年十二月七日まで）に日本の軍国主義的侵略政策に協力した責任者の追放が進められ、一九四七年十月からその氏名が逐次発表された。川喜多長政も腹心の石川俊重とともに、中華電影の要職にあったという理由で、十一月二十二日、追放令G項該当者に指定され、映画の製作・輸入等への参画、マスコミへの発言を禁じられた。

だが、それはまったく形式的、機械的な判定であって、川喜多が中華電影時代、日本の軍国主義に協力するどころか、まったくその反対であったことは前章で述べた通りである。これについては海外から多くの証言が寄せられた。[中略] 前述のユダヤ移民の記録映画『祖国を追はれて』を作ろうとした女流監督ゲルトルート・ヴォルフソンも、ロサンゼルスから、川喜多が「国家主義的、軍国主義的な思想の片鱗もない」高潔な国際人であることを、公証人立会いの宣誓のもとに証言してきた⁽¹⁴⁾。

こうした国内外の映画人からの弁護の甲斐もあって、1950年10月13日、川喜多の公職追放は解除されることとなった。

今日、川喜多記念映画文化財団には、川喜多の公職追放解除を求め、1949年5月3日付で当局に提出された「覚書該当指定の特免申請書」の控えが残されている。そこから、ロサンジェルス人のゲルトルートが川喜多のために作成した宣誓供述書の全文を以下に再録しておく。

証拠書類第五号原文

TO WHOM IT MAY CONCERN.

I have known Mr. Nagamasa KAWAKITA since my arrival in China in 1939. I have been connected with the production of motion pictures since 1925, but had to give up all work on account of the Nazi-Regime. I was introduced to Mr. Kawakita by a family friend of mine who knew him for very long years. Mr. Kawakita had a fully sympathetic view of the Jewish problem and suggested, as Vice President of the CHINA FILM CO. in Shanghai to produce under my direction a film, showing the constructive side of the emigration in Shanghai. In spite of strongest opposition by the Japanese Army which already was Nazi infected, Mr. Kawakita insisted to start the film and much work was done. If finished, the film would have helped considerably to show the enormous problem with which the Jewish Community in Shanghai was confronted. In the midst of the work, the Japanese Army categorically stopped the China Film Co. from further work. I wish to add that during all the period Mr. Kawakita and later when I had an opportunity to see him has shown an objective, kind and international outlook and has been of outstanding noble character without any tinge of super-nationalistic or promilitaristic thoughts.

(Sgd) Gertrud Wolfson
1131 So[uth]. Bronson Avenue
Los Angeles, 6, California USA

September 9, 1948

Subscribed and sworn to before me this

9th day of September, 1948

(Sgd) Riera G. Graf Notary Public

(訳文)

私は一九三九年に中国に参りました時から川喜多長政氏を知って居ります。私は一九二五年から映画製作に関係して居りましたが、ナチ政権の為に総ての仕事を放棄せねばなりませんでした。

私は永年川喜多氏と面識ある私の親友から同氏を紹介されました。川喜多氏はユダヤ問題に深い同情ある見解を持って居り、上海の中華電影股份公司の副社長として、上海のユダヤ移住民の建設的生態を描いた映画を、私の監督の下に、製作することを提案されました。当時既にナチスにかぶれてゐた日本軍の強い反対にもかかわらず、川喜多氏はその映画製作を強く主張し製作も相当進行いたしました。若しこの映画が完成したとすれば、上海のユダヤ移住民等が直面してゐた大きな問題を示すに大いに役立ったでせう。而し仕事半ばにして日本軍は無条件に同会社の製作続行を中止させました。

其の間又其の後川喜多氏にお会ひする機会を得た時も、同氏が客観的同情的、国際的な態度を示し、国家主義的、軍国主義的な思想の片鱗もない優れた高潔な人格者であったことをつけ加へたいと思ひます。

[傍点は引用者による]

「特免申請書」の冊子には、川喜多本人による16頁の証言も収録されており、そのなかで「祖国を追はれて」にまつわる事情が以下のように報告されている。

私が軍部の追従者でも国家主義者でも無くむしろ国際主義者であることを証拠だてる為に私が太平洋戦争勃発直前の国際情勢が最も緊迫して居た時期に日本軍部の意向に反して人道的立場からユダヤ避難民の為に記録映画を製作しようとした一例をあげたいと思ひます。

私は学生時代から中国を始め欧米諸国を前後十数国旅行し諸外国の風俗人情に触れ国境や民族を超越した国際親善の尊さを痛感し常々その思想の普及が人類の幸福をもたらす最良の方法であると信じて居りました。

当時狭量な民族政策の犠牲となって多くのユダヤ人が続々と上海に

避難して来て居りました。

この非人道的政策に対し全世界はもっと関心を持たねばならぬ。私はその移民の一人として上海に来た一映画監督と協力してこれ等の人々に対してもっと全世界の同情と支持とが与へられる様彼等の現実の姿を記録映画に撮影して米国始め諸外国へ送り出す計画を立てました。

軍は一部の理解者を除いてこの計画に大反対でした。

然し私は種々な口実を設け撮影を強行し八分通り出来上がった時軍は遂に強権を以ってその仕事を中止させてしまいました。軍部の反対を押し切ってこの計画を樹てその実現に努力した事は私が決して軍国主義の追従者でも極端な国家主義者でもなかったことを証明するのによい証拠の一つだと信じます。

註

別紙証拠書類第五号。ユダヤ人映画に関するヴォルフゾン氏証言参照
[傍点は引用者による]

この軍部による制作打ち切り命令について、辻久一は、『中華電影秘話』のなかに「楊樹浦地区のユダヤ人」「ドキュメンタリー映画《祖国を追はれて》」の二節を設け、それが日本の陸軍と海軍のあいだの確執を経て、1940年9月、日独伊三国同盟をもって陸軍が海軍の「ユダヤ最良」を捻じ伏せた結果ではなかったか、と推察する。

かれこれ思い合わせると、上海の海軍当局がナチス・ドイツによって祖国を追放されたユダヤ人の受け入れを決意したのは、あまりにドイツかぶれしている陸軍に対する一つの抵抗の意志表示ではなかったのだろうか。あるいは租界にいるイギリス人、アメリカ要人たちから、ユダヤ人救済の懇請でもあったのかも知れない。それに応じておくことは、海軍、ひいては中国における日本にとって、有利という判断もあったかも知れない。[中略]

惜しむらくは、[映画「祖国を追はれて」]の製作開始がおそかった。前述のように、国内政治の問題化していた日独伊三国同盟は [中略]、ついに日本政府を軍も含めて三国同盟締結に踏み切らせたのである。ということは、海軍もまた、ナチスカぶれの陸軍に同調したのである⁽¹⁵⁾。

『ゲルベ・ポスト』紙の予告記事

このように、映画「祖国を追はれて」について今日に伝えられた情報を整理・総合するなかで、筆者の目にもっとも大きな謎を構成しているのは、映画自体の完成度合いと、その公開が中止されるにいたった経緯である。

というのも、ゲルトルートらと同じユダヤ移民であり、オーストリア出身の弁護士にしてフロイトの薫陶を受けた精神分析学者でもあったアドルフ・ヨーゼフ・シュトルファー (Adolf Joseph Storfer, 1888-1944) が、上海でみずから創刊 (1939年5月) した文芸情報誌『ゲルベ・ポスト (黄色ポスト)』の1940年3月3日号で、以下のように映画の封切りを「予告」しているからだ⁽¹⁶⁾。

この3月、一本の映画が上海で初上映される。中日合同の「中華電影」社が12月から1月にかけて撮影したものだ。フィルム尺500メートル、弁士による英語の解説つきのこの映画は、上海移住者たちの日常と生活再建の試みを描く。劇映画の部分も含まれているが、主眼は、新しい環境に適合しようと最善を尽くす移民たちの努力をめぐる事実報告に置かれる。

タイトルは「追放された人々 (Driven People/Vertriebene)」。この異国の都市への到着が象徴的に描き出され、二人の若者が、その初日から、上海での成功につながり得る道を、幾多の障害をも乗り越えながら、勇気と熱意をもって切り開こうとする。主演は、すでに上海でもたびたび演技を披露し、ベルリン人ならかつての「芸術同盟」での活躍ぶり (エーファ・パールフ (Eva Baruch) の旧名で) を懐かしく思い出すに違いないエーファ・シュヴァルツ (Eva Schwartz), ならびに有望新人イーザク・ゴルトマン (Isaac Goldman) である。映画に登場してくるのはもっぱら移民たちであり、監督はニューマン＝ウォルフソン夫人 (Frau Newman-Wolfson) に委ねられた。製作の責任者は、ある日本人カメラマンであった。

映画中、上海の街の描写にはさほど力点が置かれていないが、それでも上海の住民が移民たちの支援に懸命な姿は、しっかり描かれている。加えて、同作が事実の忠実な報告であることは間違いなく、事物をありのまま、リアリスティックに観衆に示そうとする意図が伝わってくる。幕切れは、いまだ緊急支援を要している人々が集うハイム

(収容施設)の映像であるが、今後、真の支援が可能な人々のあいだでこの映像が巡回上映され、味気ない統計や報告書よりも映画において大きな説得力を発揮するであろう支援要請が、完全に無視されることのないよう祈りたい。いずれにせよ、この移民映画第一号の封切りが心待ちにされ、そこで期待された成果が達せられるよう、願わずにはいられない。

シュトルファーはここで「この3月、一本の映画が上海で初上映される (Im März gelangt in Shanghai ein Film zur Uraufführung)」と近接未来を表す現在形を用いており、遅くとも同月内に、まずは上海の地で、映画が何らかの形で公開されることを確実視している。また、フィルムの尺や、英語の弁士付きであること、さらには作品の構成や中身にまで言い及んでいることから、彼が内輪での試写会のようなものに立ち会い、すでに完成に漕ぎつけたヴァージョンを実際に鑑賞し終えていた、と考えざるを得ない。この観察を、ゲルトルートや川喜多の証言に盛られている「仕事半ばにして」「八分通り出来上がった時」という記述と、どう整合させればよいのだろうか。

公開中止の背景への洞察

まず、映画の完成度合いについて、筆者は、第二次大戦の波乱の時期を経た8年後に当時を振り返るゲルトルートと川喜多の言葉よりも、1940年3月の〈現在時〉に由来するシュトルファーの言葉の方が、事実関係の推測の上では優先されるべき、と考える。何よりも作品に関するシュトルファーの叙述が具体性を極めており、なおかつ、いまだ制作途上の映画について、それがあたかも公開直前であるかのごとく装って、彼が『ゲルベ・ポスト』の予告記事を書き上げる理由がどこにも見当たらないからだ。

可能性として、ゲルトルートの側では、映画を上海で上映するのみならず、それにより世界中のユダヤ世論に自分たちの境遇を訴えかけることをもって目標達成とみなしていたため、「作業の最中に」(in the midst of the work) 中止命令が下った、という表現を用い、他方、後年の川喜多も、映画が完成に漕ぎつけたと伝え聞いた記憶は臆気になりながら、ゲルトルートの宣誓書と平仄を合わせるため、「八分通り」という言葉を選んだのかもしれない。

次に、最終的に公開が差し止められた原因としても、上掲『東和の半世紀』の一節のように、ゲルトルートと川喜多の陳述を敷衍する形で「日独伊三国同盟が調印されるにおよんで」と、当時の外相・松岡洋右の主導下、1940年9月27日、ドイツ外相ヨアヒム・フォン・リッペントロープ、イタリア外相ガレアツォ・チアーノ、日本特命全権大使・来栖三郎がベルリンで調印した条約に言い及ぶ前に、同年3月の時点で映画の公開に不利に働いた要因を探るべきではないか、と考える。

ならば、1940年の上半期、映画の公開に「待った」をかける要因とは何であったか？ 上海の日本世論におけるユダヤ観の変遷を時系列で見極めようとする本連載の流れのなかで、その第一の要因は、同年2月以降、『大陸新報』紙上をも賑わせることとなる上海ユダヤ財閥の筆頭ヴィクター・サッスーンによる反日発言とその余波ではなかったか、と筆者は見るが、その詳述は次稿に繰り越さねばならない。

いずれにせよ、この一件について鍵を握る日本側の人物は、1939年4月、支那方面艦隊司令部付・上海海軍武官府に配属され、ユダヤ対策を主務とする特別調査部（通称「犬塚機関」）を立ち上げた犬塚惟重・海軍大佐であったと見るのが至当であろう。

前稿で述べたとおり⁽¹⁷⁾、1939年末から翌1940年4月にかけて、上海のユダヤ居留民たちが、上海共同租界市参事会の熾烈な選挙戦のなかでキャスティング・ヴォートを握られそうになる事態が発生した。まさに「祖国を追はれて」の制作と重なるこの時期、犬塚からすれば、日本軍政当局が映画制作に理解を示し、それを鼓舞さえしているという文脈を醸し出すことは、ユダヤ票の取り込みを狙う日本側にとって好材料になる、と感じられたに違いない。1939年12月16日の『大陸新報』【記事33】中、「皇軍の温情下に楽しむ建設団」「これが完成の暁は正義日本の真意を認識せしめる結果ともなる」といった文言は、犬塚が書かせたとまでは断定できないまでも、彼の意図を十全に汲み尽くしたものと見て間違いない。

加えて、同記事中――

日本軍当局の温情ある保護の下にウエイ・サイド楊樹浦の一角に新しき彼らの街を建設し今では平和の生活を楽しんでゐるがこの尊い汗の建設譜と秩序ある現実の姿を映画化してアメリカの金融報道宣伝の枢軸を握れる同胞を初め全世界に分散せる同胞に紹介すべく

の一節からは、1939年7月、アメリカによる日米通商航海条約の破棄通告以来、険悪化の一途を辿る日米関係を、「ユダヤ人の保護」をキータームとして改善に向かわせよう、少なくともそれ以上悪化させまい、とする犬塚の狙いをそのまま表現するものと捉えることもできる。

残念ながら、当時の犬塚の行動の軌跡をきわめて具体的に描き出す、犬塚きよ子『ユダヤ問題と日本の工作——海軍・犬塚機関の記録』（1982年）には、映画「祖国を追はれて」の制作や公開中止をめぐる記述は見られない。しかし、ユダヤ居留民たちの映画自主制作を現地で強力に側面支援しようとする川喜多長政が、日本軍政当局の理解と許可を取り付けるため、最初に接触すべき人物は、間違いなく犬塚であったはずだ。後年、「特免申請書」なかで「軍は一部の理解者を除いてこの計画に大反対でした」と述べる川喜多の脳裏に、その「理解者」として蘇ってくる第一の存在も、犬塚であった可能性が高い。

ただ、その犬塚をもってしても、1940年3月以降、サッスーンの反日発言を引き金として上海の日本世論ならびに日本軍政当局の内部に沸騰した反ユダヤの論調には抗しきれず（のちに見るように、『大陸新報』紙上、その急先鋒となるのが、犬塚の私設秘書にしてのちの妻、新明（犬塚）きよ子であった）、とりわけ陸軍から発せられた映画公開の中止要請を跳ね返すことができなかったのではないかと、との推測が成り立つのだ。

この意味で、映画「祖国を追はれて」の制作（ないし公開）中止命令の背後に、日本軍政当局内部における陸軍・海軍間の確執ないし綱引きの所在を示唆する上掲、辻久一の観測は、みずから兵卒として上海軍報道部に配属された人間ならではの洞察力に裏打ちされたものと言えよう。ただ、それをもって「海軍もまた、ナチスカぶれの陸軍に同調した」と断ずるのは、歴史的観点からして性急の感も拭えない。むしろ、海軍よりも陸軍の内部にナチス・ドイツへの共鳴者が多かった事実や、1940年9月の日独伊三国同盟が映画「祖国を追はれて」の封切りにおそらく止めを刺すことになったであろう事情も斟酌した上で、同年3月、『ゲルベ・ポスト』による近々の公開予告にもかかわらずそれが実現ならなかった理由を、さらに実証の水準で突き止めていかねばならない。

*

本稿の末尾にて繰り返し、筆者は、幻の映画「祖国を追はれて」が、後年のゲルトルートや川喜多の「仕事半ば」「八分通り」という言葉にも反し、実際に完成に漕ぎつけ、ただ公開を待つばかりであった、との見方を採る。その500メートル長のリールが、世界のいずこか（ゲルトルートの末裔たちのもとか、中国の映像資料館の奥深くか）に今も眠っており、再発見の日を待ち焦がれているのではないか、という希望的観測とともに、日本内外の映画研究者・愛好家諸氏からの情報提供を切にお願いしたい。

本稿は、JSPS科研費、平成29～令和2年、基盤研究（C）（1）課題番号17K02041、ならびに平成30～令和4年、国際共同研究加速基金（国際共同研究強化（B）課題番号18KK0031の助成を受けた。また、本稿に必要な資料調査の面（とくに川喜多長政関連）で、上記科研費に研究協力者として加わっている映像作家、大澤未来氏の協力を仰いだ。

註

- (1) Karl Sierek, *Der lange Arm der Ufa: Filmische Bilderwanderung zwischen Deutschland, Japan und China 1923-1949*, Springer VS, 2017, p.484.
- (2) 張善琨については以下を参照。矢野目直子「日中戦争下の上海に生きた映画人—張善琨」, 神奈川大学大学院『言語と文化論集』第3号, 1996年。
- (3) たしかに楊樹浦の日中戦争激戦地跡には、1938年からドイツ・ユダヤ避難民たちが多く住み着いていたが、それが「無国籍避難民指定居住区」として「指定」を受けるのは、のちの1943年2月18日のことである。
- (4) 清水晶ほか編『東和の半世紀 1928-1978』, 東宝東和株式会社（非売品）, 1978年, 289頁。
- (5) 辻久一『中華電影秘話—兵卒日中映画回想記1939-1945』, 凱風社, 1987年, 121-122頁。
- (6) 以下の伝記情報は、ゲルトールの姉レーハの孫ミハエル・ヴォルフゾーンによる家族の年代記（Michael Wolffsohn, *Deutschjüdische Glückskinder: Eine Weltgeschichte meiner Familie*, DTV Verlagsgesellschaft, 2017）, ならびにアメリカ、ロサンゼルスに拠点を置く家系図サイト <https://www.geni.com/>

people/Gertrude-Wolffsohn/6000000016486936697にもとづく。

- (7) Wolffsohn, *op.cit.*, p.105.
- (8) <https://www.dignitymemorial.com/obituaries/marblehead-ma/peter-neumann-6852622>
- (9) この写真ならびに後出「特免申請書」の存在をご教示くださり、閲覧・転載を許可して下さった公益財団法人川喜多記念映画文化財団・佐藤京子、和地由紀子両氏に、この場で厚くお礼申し上げます。
- (10) 辻久一前掲書, 123頁。
- (11) 1944年8月24日, 上海, 虹口・揚樹浦地区を管轄する提籃橋分局特高股が作成した「管内外人名簿」。Georg Armbrüster, Michael Kohlstruck, Sonja Mühlberger, *Exil Shanghai 1938-1947: jüdisches Leben in der Emigration* (Teetz, Hentrich & Hentrich, 2000)の付録CDとしてデータ化されている。
- (12) Wolffsohn, *op.cit.*, p.114.
- (13) 辻久一前掲書, ならびに, 晏龔『戦時日中映画交渉史』, 岩波書店, 2010年。
- (14) 前掲書『東和の半世紀 1928-1978』, 300頁。
- (15) 辻久一前掲書, 120-122頁。
- (16) この『ゲルベ・ポスト』紙の記事は, Paul Rosdy, « Emigration und Film » in, Theodor Kramer Gesellschaft (Hg.), *Zwischenwelt. Zeitschrift für Kultur und Literatur des Exils und Widerstands*, Bd 2, Wien, 2001, pp.65-66に再録されている。オーストリアの映画監督Paul Rosdyは, 戦時期上海のユダヤ難民を描く優れたドキュメンタリー映画「上海逃避行」(Zuflucht in Shanghai, 79 min., 1998)の共同監督である。筆者の照会に応じ, 『ゲルベ・ポスト』の記事の存在を知らしめてくれたRosdy氏に深謝申し上げます。
- (17) 拙稿「『大陸新報』に見る戦時期上海のユダヤ社会—(3) 1939年9月～1940年2月」, 『東京理科大学紀要(教養編)』第53号, 2021年, 157頁以下。

The Jewish Society in wartime Shanghai as reported in *Tairiku Shinpo*

(Part IV: On the unreleased movie 'Driven People')

Kenji Kanno

Abstract

This series of papers is based on a thorough search of articles in *Tairiku Shinpo* identifying those that mention Jewish residents in Shanghai under the Japanese military control. The present fourth part addresses the unreleased and as yet undiscovered movie on Jewish immigrants in Shanghai: 'Driven People'. The film production was headed by the German refugee of half Jewish origin, Gertrud Neumann-Wolfson, and technically supported by China Movie Company under the supervision of the Japanese film producer and importer Nagamasa Kawakita.

Tairiku Shinpo on 16 December 1939 reported the start of shooting of the movie and the local German paper *Gelbe Post*, run by A. J. Storfer, announced its forthcoming release in March 1940. Nevertheless, the movie would never be screened and the whereabouts of its reel or uncompleted footage remain unknown up to the present time.

As for the motives underlying this ban of screening, historians have tended to refer to the Tripartite Pact signed between Germany, Italy and Japan on 27 September 1940. Further insight into the contemporaneous articles of *Tairiku Shinpo*, however, seems to reveal another unfavorable condition for the film release: in the end of February 1940, Victor Sassoon's anti-Japanese speeches aroused a storm of controversy, which presumably interfered with the post-production work by Wolfson and Kawakita. This controversy will constitute the subject of the following fifth part of the present series of archival research.